

# 家庭と宣教

家庭を支え福音を生きる教会共同体の実現をめざして

日本カトリック司教団



キリストにおいて兄弟姉妹である皆さん

「家庭の現実から福音宣教のあり方を探る―神のみ旨に基づく家庭を育てるために―」を主題として開かれた第二回福音宣教推進全国会議（以下、第二回全国会議と略します）は、日本におけるカトリック教会の、一つの記念すべき集まりでした。

この集まりにおいてわたしたち信者一同は、それぞれ違う場所に住み、異なる問題に直面していても、同じ神の子、同じキリストにおける兄弟姉妹であることを確かめ合うことができました。また、日本の教会が、さまざまな人間の弱さと限界をもちながらも、聖霊の導きのもと、ともに一つの仲間として同じ歩みを続けている、という喜びを確認しました。参加者は、それぞれそのことを体験し、その喜びを自分の教区へもちかえることができたと思います。

## 一、家庭の現実から

教会の使命は福音宣教です。第一回福音宣教推進全国会議（以下、第一回全国会議と

略します)に際し、日本のカトリック教会は、福音宣教のあり方を考えるにあたって、生活の現実から出発する方向を選びました。第二回全国会議は、第一回全国会議にならない、人々の生活の中心である家庭の現実に焦点を当てることから出発して、この使命に取り組むことにしました。

現代の家庭をみてもまず気づくことは、社会のあり方が家庭に大きな影響を与えているということです。今の社会では、経済価値が過度に優先され、人よりも物を大切にする傾向が目立ちます。この社会のあり方は、その基本的構成単位である家庭の人間関係に深刻なゆがみをもたらしています。<sup>(1)</sup>

また、最近の人々の性や結婚についての考え方のなかには、人間の尊厳に反する点が含まれています。本来、男女の性は、結婚によって夫婦の共同体をつくり、新しいのち、子どもを生み育てることに向けられています。最近、この点について、人々の考え方は変わってきました。性のもつ意義と役割、さらに倫理についての意識も大きく変わりつつあります。新しいのちの誕生についての配慮にも多くの問題がみられます。

このような現象の背景には、社会の重圧に苦しむ人間の弱さがあり、他方、一人ひ

とりの人間のエゴイズムという問題があります。

しかし反面、人間と家庭の正しいあり方を模索する動きもみられます。「このころの時代」といわれてから久しくなりますが、多くの人々は、経済価値が人間にとって第一の価値ではないことにあらためて気づき、家族の交わりを大切にするようになっていきます。人々の間で、高齢者への配慮、女性の人権、そしていのちの尊厳に対する意識も高くなりました。さらに、家庭という枠組みを越えて、病者や障害者の介護に献身し、幼いいのちの尊さを訴え、また子どもの人権を擁護する人々の声もしばしば聞かれます。

このように、現代の家庭には、人間らしく生きたいという切なる飢え渇きがあり、また、一人ひとりの人格の尊厳を大切に作る動きもあり、それを「福音の芽生え」とよぶことができます。

この現実をみると、今の家庭こそ救いを必要としている、といえます。この救いを求める叫びは、たとえ人々が意識していないとしても、救い主キリストへの飢え渇き、キリストを求める叫びであるといっても間違いではありません。この叫びにこたえることが、今のわたしたち日本のカトリック教会の務めではないでしょうか。

## 二、愛の共同体である家庭

この現実を前提として、あらためて、教会の教える家庭とその使命について考えたいと思います。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、「家庭は、人間共同体すなわち夫と妻、親と子、親戚からなる共同体です<sup>(2)</sup>」と述べています。また、家庭は次の四つの使命をもっていると考えています。

- ① 愛の共同体をつくること。
- ② 生命に仕えること。
- ③ 社会の進歩発展に参加すること。
- ④ 教会の生命と使命に参加する<sup>(3)</sup>こと。

この使命を生きることは決して容易なことではありません。しかし、この理想に向かって進むようわたしたち一人ひとりを励まし助ける神の愛、神の力をわたしたちは受けることができます。家庭は何よりもまず愛の共同体です。愛があつてこそわたしたちは、家庭の使命に参加し、家庭の使命を生きる事ができるのです。

そこでわたしたちが、愛の共同体である家庭を築いていくためには、まずわたした

ち一人ひとり、神の愛をしつかりと受け止めることが必要です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛されました」（ヨハネ3・16）。どんな家庭も、いかなる状況におかれていても、この神の愛から切り離されてはいけません。信仰を通して神の愛を深く知れば知るほど、わたしたちには神の愛にこたえる力が与えられることでしょう。なぜなら、「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」（ローマ5・5）。

イエスは、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしのおきてである」（ヨハネ15・12）といわれました。わたしたちはまず、イエスが、どんなに深くわたしたちを愛してくださっているのかを知らなければなりません。そうすれば、わたしたちも互いに愛し合うようになるでしょう。またイエスは、「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしのおきてを守る」（ヨハネ14・15）といわれました。イエスがわたしたちに与えられたのは愛のおきてです。愛のおきては、自由を束縛するものではありません。それは、わたしたちが日々の生活のなかで神の愛にこたえていくよう、促し駆り立てる聖霊の働きです。この機会に、おきてということと具体的に神の愛にこたえる道として、あらためて教会共同体のなかで再確認した

いと思います。

### 三、家庭を支える教会

#### 家庭と教会

神に対する愛は隣人に対する愛によって表現され、実行されます。隣人愛はまず家庭において実践されるべきです。ところで、日本の教会の信者のなかには、家族全員が信者ではない家庭に属している人が少なくありません。教会生活を送ることについても、具体的な生き方の点でも、家族の考え方や意識の違いに苦しんでいる人も少なくないと思います。この点において、まさに家庭は、教会と社会の接点であるといえます。この現実のなかでキリスト者としてあかしをすることは、言うはやすく行うはかたし、といえるでしょう。

〔4〕「家庭は教会の生命と使命にあずかり、歴史のなかで神の国の建設に奉仕しています」。家庭も教会も、ともに愛の共同体であり、いのちを生み育てる共同体です。実際、カトリック教会の伝統のなかに「家庭の教会」という表現があります。それは、



家庭とは本来、教会の生命と使命に参加するものであることを端的に表しています。現在の日本の現実には、この理想から離れていますが、いつの日か、すべての人が神の家族となる日を待ち望みながら、ともに手をたずさえて歩いていきたいと切望しています。

#### 共感・共有を通して

教会共同体の務めは、信者が日々家庭において、神の愛にこたえて「家庭の教会」を築いていくよう、支え助けることにあります。司教、司祭、修道者、カテキスタなども、そのためにそれぞれの責任を果たすよう招かれています。

ところで、この務めを果たすにあたって、わたしたち一人ひとりの信者は、「共感・共有」ということを大切にしたいものです。わたしたちがイエス・キリストにならない、日々出会う人々、とくに弱い立場におかれた人々の苦しみや痛みと共に感じ、それを担い、それを信者の交わりのなかで、キリストの十字架とともに神にささげながら、言葉と生活によってキリストの生き方を宣言するとき、わたしたちは、愛のおきてを実行しているといえるでしょう。そのような地味で目立たない日々の努力の積み重ねのなかに、新しい福音宣教のあり方があるのではないのでしょうか。

教会共同体が、家庭を支え、家庭を通して福音宣教を推進していくためには、一人ひとりの信者の信仰生活をより豊かなものとするのが不可欠です。そのための一つの大きな源泉は典礼です。というのは、典礼、とくにミサこそ、神と人、そしてキリストにおける人と人との交わりと一致の頂点を示すものだからです。

第一回全国会議の提案にもすでにみられるように、典礼と家庭生活の関係をより緊密なものとすることは日本の教会共同体の大きな課題となっています。

ところで、第二バチカン公会議の典礼刷新は、日本の教会にも、かなりの工夫と創意の可能性を開いてくれました。ですからまず、現行の典礼の精神と法規を学ぶことはたいへん有益です。また、すでに全国で行われているさまざまな試みの分かち合いを行うことも大いに勧められます。

それぞれの共同体で、日本文化のなかに福音が開花し、典礼が人々の心の琴線に触れ、生活の力、光、導きとなるように、努力を続けましょう。

若者の信仰と活動

若者への配慮は、第一回全国会議以来の重要な課題です。第二回全国会議は、若い

人々の信仰を深めるよい刺激と励まし契機となりました。若者は固有、独自の使命をもつ存在です。若者たちや少年少女がともに集まり、学びながら、祈りと信仰を深めることのできる場が教会共同体のなかにあることが必要です。

若い時代はエネルギーにあふれている時代です。その力が教会と社会のなかでキリストをあかしする活動に向けられるように期待しています。この活動の体験は人生の喜びとなり宝となると信じています。

なお、この課題には、教会共同体とともに家庭自体の努力も大きな要素を占めているということをあらためて思い起こしたいものです。とくに、家庭における「分かち合い」や家庭の祈りなどの努力と工夫が求められています。

#### 四、分かち合いを通して

愛の共同体である教会と家庭を支え育てていくために、『ともに喜びをもつて生きよう―第一回福音宣教推進全国会議にこたえて―』で述べた「ともに」の精神、そしてすでに述べたその趣旨をいかす「共感・共有」が大切です。この精神と趣旨を育て

る一つの道として、第二回全国会議・答申「展望―福音宣教する日本の教会の刷新のために―」（以下、「展望」と略します）で提案されている「分かち合い」の意義を考察してみたいと思います。

「言葉による分かち合いにとどまらず、物や時間やお金などを含めて自分自身の痛みを伴う生き方を分かち合う、このような生き方が福音宣教の重要な柱として定着していくことが大切であり、さらに『福音宣教』と『分かち合い』との関係をより明確にすることが求められています」と、「展望」は述べています。

「分かち合い」には、貧しい人々、苦しんでいる人々とともに苦しみ、自分が受けたたまものをその人々とともに分かち合うことも、本質的な要素として含まれます。

「分かち合い」にはまず、同じ人間としての深い共感と共有がなければなりません。その模範を示したのは、人となられた神であるイエス・キリストご自身です。

わたしたちはこのキリストが、生活の現場でそれぞれ真剣に生きようと努力している人、とくに困難な状況のなかでキリストに従おうと努力している人とともにおられ、声をかけてくださっていると信じます。

わたしたちが、キリストを中心に集まり、心を開いて語り合うとき、キリスト

の声はより力強く響きます。そうすれば、自分自身の状況を正しくわきまえるだけではなく、兄弟姉妹の立場にも正しい理解を示すことができるよう変えられることでしょう。このようにして、わたしたちはともに重荷を担いながら、「展望」のいう「現実を識別して（見分けて）生きる信仰者」として成長することができると思います。

「分かち合い」は教会共同体全体の課題であり、わたしたち一人ひとりの課題です。「分かち合い」が福音宣教とつながるものであってほしいと願っています。そのためには、「分かち合い」の神学的意義をさらに探究することが必要です。福音宣教とは何か、そして、いかに福音宣教すべきかの基準は、イエス・キリストご自身の生き方とその福音宣教にあります。日々の祈りと体験、そして、聖書と教会の教えの学習を通して、この課題を追求していくことが、一人ひとりに切に求められます。<sup>(5)</sup>

終わりに

わたしたち司教団は、今後も全国の皆さんの声に耳を傾けながら、皆さんと手をたずさえて、福音宣教しようとする日本の教会の刷新運動を継続させ発展させていく決

意です。現実のなかで理想を求めて努力するには多くの困難を伴いますが、それを一つひとつ克服して前進していくことこそ、キリスト者の道であり、そこにこそ大きな喜びがあります。キリストを見つめつつ、聖霊に導かれ、真心こめて、神の恵みにこたえてともに歩んでまいりましょう。

教会の母である聖母マリアの取り次ぎによつて、皆さん一人ひとりのうえに父と子と聖霊による慰め、光、導き、力を願いながら。

一九九四年三月二十四日

日本カトリック司教団

## 注

- (1) 「NICE・2における濱尾文郎司教の基調考察―家庭を取り巻く社会の現実」(『カトリック新聞』一九九三年十一月十四日号、十一月二十一日号、十一月二十八日号)参照。
- (2) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勅告『家庭―愛といのちのきずな』(Familiaris consortio) 18。教皇や司教は、教会の指導者としてキリストの教えを伝えたり説明したりする、教導権の責任をもっています。公会議や教皇の教えは、今この世界のなかで、キリストがお望みになることを示すものですから、信者はこれを真剣に学ぶことによって、そこから多くの光を得ることができます。なお、家庭を取り巻く社会の構造に関する問題については、教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『真の開発とは―人間不在の開発から人間尊重の発展へ―(Sollicitudo rei socialis)』をはじめとする数々の社会回勅の学習が有益です。
- (3) 教皇ヨハネ・パウロ二世『家庭』17参照。
- (4) 同49。
- (5) 福音宣教についての教会の教えを学ぶことが大切です。とくに次の二つの公文書、教皇パウロ六世使徒的勅告『福音宣教(Evangelii nuntiandi)』、教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『救い主の使命(Redemptoris missio)』を学習するようお勧めします。

第二回福音宣教推進全国会議・答申

展望—福音宣教する日本の教会の刷新のために—

司教団の皆さま

はじめに

このたび、殉教の地、長崎に集い、福音宣教のあり方を探る機会を与えられたことを神に感謝いたします。

一九八七年第一回福音宣教推進全国会議において、生活から信仰の見直しをすることが確認されました。「信仰をおきてや教義を中心としたとらえ方から、『生きること、しかも、ともに喜びをもつて生きること』を中心としたとらえ方に転換したいと思えます」。これが第一回福音宣教推進全国



会議の答申に対する司教団のメッセージの中心理念でした。わたしたちは、このメッセージに心から共感し、思いを共有して、不十分ながらここまで歩みを進めてまいりました。

一九九〇年の司教総会で第二回福音宣教推進全国会議のテーマが「家庭」と決まり、さらに昨年七月に、全国から寄せられた各教区の課題案をもとにして「家庭の現実から福音宣教のあり方を探る」という課題が司教団から出されました。これに基づき、わたしたちは、社会、家庭、教会におけるさまざまな現実のなかにキリストを見いだすために、種々の分かち合いを通して、信仰のうち一人ひとりの喜びや苦しみ、悲しみに共感し、問題を共有することのできる実りを祈り求めてまいりました。

この四日間、わたしたち参加者一同は、試行錯誤を繰り返しながらも、真剣に分かち合いを重ねました。そのなかで、とかく自分の所属している教区、小教区にしか思いが届かない者にとって、全国的視野で教会共同体を眺めることの大切さと、聖霊の照らしなしには福音宣教の行方を見定めることができない、ということにあらためて気づきました。

## 社会

わたしたちの社会には、お金や学歴を中心とした見方、行き過ぎた管理体制、能力主義、利己主

義の傾向が目立ちます。それは日本さえよければ他の国はどうでもよいという考えにもなります。個性や多様性が認められず、画一化の傾向もあります。わたしたちは、このような日本の社会構造のゆがみが、家庭にとって重荷となつている現実もみています。しかし、わたしたちは、社会の現実そのものを悪とみなすのではなく、福音の芽生えもあることを認めています。たとえば、身の危険をおかしてまでも他者にかかわる海外へのボランティア活動、病者や高齢者の介護、弱い立場におかれている人々とともに歩むなど、多くの姿を見いだします。このように、社会のなかに働いている福音の光を決して見落とさないようにしたいものです。

## 家庭

現代の家庭は、社会のいろいろな影響を受けています。たとえば生命を大切にし、親子、夫婦で対話をし、交わりのある家庭でありたいと願つてはいても、その実現は容易ではありません。それらの家庭の願いが実現されるには、社会の風潮に流されない努力と、それを支える神の恵みが不可欠です。ところがその神の恵みを仲介する教会そのものが、家庭と家庭を取り巻く困難な状況とあまりかかわつてこなかった事実を認めないわけにはいきません。

現代社会のただ中で生きる家庭を受け入れ、支えることができるようになるためには教会共同体

の刷新が不可欠です。教会共同体が刷新されるならば、さまざまな状況にある人々のなかにキリストの現存を見いだすことができるでしょう。いろいろなことで悩んでいる家庭には、十字架を担っておられるキリストを、そしてゆるし合い支え合う家庭には、復活したキリストを見いだすことができます。また教会共同体が刷新されれば、教会は、どのような人にとっても心温まる家庭となることでしょう。

#### 教会共同体

この教会共同体刷新のために必要な優先課題として、以下の五項目が参加者の総意として浮かび上がってきました。また相互に養成し合うこと、結果を焦らず継続的に取り組むこと、すでに一部では始まっていますが、教区を超えた協力が求められています。

#### ①分かち合いの理解と促進

言葉による分かち合いにとどまらず、物や時間やお金などを含めて自分自身の痛みをも伴う生き方を分かち合う、このような生き方が福音宣教の重要な柱として定着していくことが大切であり、さらに「福音宣教」と「分かち合い」との関係をより明確にしていくことが求められています。

■きめ細かな準備、対象や趣旨に応じたよいプログラム・手引きの作成、聞くことの訓練。

- 技術だけでなく霊的な奉仕を担うことのできる進行役（リーダー）の養成。

- 信徒間のみでなく、司祭相互、信徒・修道者・司祭・司教間での分かち合いの必要。

## ② 共感・共有ができる共同体をめざして

今回の第二回福音宣教推進全国会議への取り組みにおいて、「共感と共有を求めて家庭の現状を見つめ」て歩んできましたが、それをさらに進めるために以下の事柄を優先すべきと考えます。

- 弱い立場におかれている人々（滞日・在日外国人、難民、少数民族、被差別部落の人々、障害者、病者、高齢者、子どもなど）とともに歩む。

- 行事中心の運営から脱皮し、福音宣教を優先する小教区共同体へ。

- まだ定着していない女性の参画の場をさらに広げる。

- 現在の刷新の動きを理解しきれずにいる人々を受け入れ、さまざまな事情で教会から足が遠のいている人々との交わりを回復する。

- 共同体づくりの方針策定、プログラムづくり（司教団、宣教研究所、諸団体の豊富な経験を提  
供）。

## ③ 現実を識別して生きる信仰者の養成

他者の痛みを敏感に感じる心を育て、個人的信仰からともに歩む信仰へと成長していくために

は、より深い信仰を求めて生涯にわたって継続的に養成される必要があります。また信徒・修道者・司祭・司教が協働できるようになるための養成も必要であると思われます。

■ 研修センターなどの活用。

■ 小教区の現場へ出向く研修チームの養成。

■ 教区に恒常的養成機関を設置する。

#### ④ 典礼の工夫

互いの交わりを深め、生活に根ざした信仰者を育成するために、典礼の刷新は欠かせません。とくに主日のミサを生き生きとしたものにするためのさらなる工夫を求めます。

#### ⑤ 青少年の信仰育成

青少年に対する教会の姿勢を抜本的に刷新する必要があります。青少年がありのままに受け入れられ信頼される環境と、具体的な場をつくることは急務です。とくに、指導者の養成、教会学校の充実（カリキュラム、専従者の配置）などが求められます。

### 刷新運動の継続

今回の第二回福音宣教推進全国会議への歩みの過程で、わたしたちは、その準備の一つひとつが、

単なる「会議」のための準備という種類のものではなく、日本の教会全体を刷新する「運動」そのものであるという確信をもつことができました。

この「NICE運動」とよぶこともできる教会刷新の動きが聖霊の導きによるものであることを信じて、これからも日本の信者全員が一致協力して、これを継続、促進していくことができるよう、司教団の優先課題として受け止めていただきたいと願っております。

#### むすび

この答申をむすぶにあたり、会議の間、そしてその前後、全国の善意の方々から寄せられた数多くの祈りに対して、心から感謝の意を表します。もし、わたしたちが少しでも自分たちの任務を果たし得たとすれば、それは、この方々の祈りによるものです。

この会議がめざした共感・共有は、体験の領域に属するもので、言葉による表現を超えるものです。しかし同時に、会議である以上、何らかの言葉で表現せざるを得ないものでもあります。参加者一同、この点でとまどいました。この答申の背後には、言葉にならない無数の共感や共有をめざした実践の積み重ねがあり、むしろこのことを真実の答申であることを申し添えさせていただきます。

日本におけるカトリック信仰の故郷といわれる長崎でこの会議に参加できたことは、なにもものにもまさる喜びでありました。

最後に、この会議のために誠心誠意ご奉仕くださった方々、とくに地元長崎大司教区の皆さまに心からお礼を申しあげ、これからの日本の教会の「展望」として答申いたします。

一九九三年十月二十四日

第二回福音宣教推進全国会議参加者一同

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお、点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

## 家庭と宣教

家庭を支え福音を生きる教会共同体の実現をめざして

---

1994年4月15日第1刷発行

頒布価 100円(本体97円)

1994年7月1日第2刷発行

日本カトリック司教団教書

発行所 カトリック中央協議会

135 東京都江東区潮見 2-10-10

日本カトリック会館内

☎ 03-5632-4411

---